

手紙にかえて

百人香に 思うこと

やまじ

A君、元気であるか。キャンプ中はいそがしさにかまけて満足に通信もしなかった。紙面をかりて君や百人香について最近考えていることを伝えよう。

近ごろ、俺や彌栄にとっての百人香の重要性がわからなくなった。というの、ワークキャンプが終ろうとしているのに、その間、百人香のメンバーでキャンプを自己の運動、共同体創りの一環としてあるいは他者への働きかけの場として、創造しようとした奴はいなかった。キャンプの準備としてピラミ、オリエンテーション、資料集めなどはやってくれたし、キャンプをどう運営するかという話しあいもあつた。聞いている。しかし、問題は百人香のメンバーがその運動にメンバーをどれだけまきこむかという立場でキャンプ

にかかわったかどうかだ。キャンプに参加する期間が限定されていたり、

参加できなかつたにしても、キャンプに知らぬ顔をしたり、若干主体的なメンバーでいる程度なら、何か百人香のメンバーだと言いたい。

俺の百人香運動とは？

キャンプ中は飯の作り方、布団のひき方、釣魚のわりふり、ミーティングの運営、人生相談、共同体運動の説明、百人香のこと、彌栄のこと、その他、常駐者は4人でいる時の日常にこれだけのことを加えて、メンバー一人一人にたててきた。4人とも本当にたくただ。その間、君らは、百人香のメンバーとして、一体何をしていたのだろうかどグチりたくも存る。俺の日常のほとんどは、共同体のことであり、彌栄であり、百人香だ。道楽や趣味や片手間でやっているわけじゃないんだ。そ

水びのに大阪の百人香の集会の話が流れてくると、「部分制に」とか「できる限りに」とか言動をこぼさう、てなこぼかりだ。

なめA君。今共同体にいる俺と大阪にいる君とを比較して言っているんじゃないんだ。共同体を創るってこと、共同体を夢みるってことは共同体にいないにいかわらず自分のすべてをその共同体志向のもとに、ひきずり出すってことだ。だから、個人が百人香の活動をその個人の日常と切り離した一部分として行なうなんてさやこばいと思うんだ。例えばA君、君が共同体を志向しているとして（事実君は志向していると言っていたが）、君と俺との共同体志向が異なっていれば君と俺とは部分的にかかわることになるだろう。けれど連合体としての百人香の活動では、君と俺との異質の部分その中で共存しければならぬ。

今度のキャンプで

キャンプに話を戻そう。ワークキャンプは彌栄をおこぼれはした。百人香のワークキャンプ。俺だ。だから俺は俺で君は君でキャンプを運営すべきだった。俺のキャンプ運営に君が協力するんじゃない。一致できる点は、一緒に、一致できない点は対立すべきだったんだ。

もうキャンプも終わる。参加した約50名のメンバーに対し、君春のキャンプのあと、百人香の集会所がたれるたびに、参加者が減ってゆき、百人香の活動もほとんど前進しなかった。俺は、同じことをくり返す気はないし、今のままの君や、百人香なら君等を無視した形で俺の運動の中に俺の手でメンバーをまきこんでゆくつもりだ。

キャンプは 何だったのか

もちろん、共同体を自己の全体性をかけて志向している個人や、共同体との連合は必要だとは思っている。けれど現状の様に、個人がそれぞれに共同体志向、その実現への展望を不明確にしていられる連合体など、俺の共同体運動からはてこばい。君とのかかわりこのままでは俺には創っていかねない。どうか今後、連合の可能性を新たに視出すために次の項目に答えてくれ。

①今度のキャンプを君の共同体運動の中でどう考えていたのか、具体的にかかわったのか。②キャンプ終了後、それぞれの日常空間へ帰ったメンバーに対してどんなにかかわり方をするつもりなのか。③君のどの部分が、彌栄のどの部分とかわかれるのかへできるだけ具体的に④君は君の日常を君の共同体志向とどう結びつけているのか。⑤それらを前もたうて百人香にとって何故百人香が必要なのか。

夜にはセーターが恋しくなってきた彌栄より 山崎真哉

共同体をよける自由とは

額上 仁一

共同体という場では、何をしても許される自由があるのだ、というアナーキーな幻想があるように思われる。つまり、共同体では個人は生産労働の向くまま、情眼も泥酔も思いのまま、という訳である。この際、はっきりさせておこう。結論から言って、かかる思想は絶対に容認されえない。

恣意的自由を超えて

自由とはそもそも、歴史的社会的に規定されたものである。我々は資本主義社会という現下の状況に制約された範囲内の自由しか持ちえず、そして、そのような現実を持った自由しか明確には意識できない。自由の意識は主観の恣意ではないのだ。無原則、無底意、自由、即ち、単に資本主義社会の極端からの逃亡でしかない自由。希求することは、自由の意識の端

初であり、自由の意識の即目的形態である。このような自由の意識の即目的段階では、往々にして「何をしても許されるのだ」という、自由の恣意的な把握がなされがちであるが、その内容たるや、それはそもそも資本主義社会の束縛からの、単純反発的自由でしかないという事実を決して看過してはならない。「自由」というものを完全な個人主観の恣意としかとうえ得ない思考では、理論的にも破産している、とみなさることも致仕方がないであろう。

我々の共同体は、資本主義社会の胎内にあり、常にその強圧のもとにさらされ、生息している。従って、その条件のもとでの、それらに抗しての、自由の空間の形成であり、自由の享受であることに盲目であることはできない。それ故

我々には、事を判断するにあたって性急すぎることは万々警戒しなければならぬが、共同体を死に至らしめる一切の自由は、許されるはいないことは、十二分に明らかな理である。

制度一般の否定をなく

共同体における個々人の自由を単に主観的恣意とすりかえる思想からは、又、次のような誤りが派生する。即ち、制度一般の端的な否定である。食事当番の輪番制や労働の分担制や起床時間的一般的設定をすり否定し、それら全てを個々人の「自発性」にまかせよとする主張である。なるほど、個々人の自発性はもとより重要である。しかし、同時に、同様に重要なのは、その自発性を如何に集団の中で適切に組織し、配置し、折り合わせてゆくか、ということである。共同体という集団生活に生きる以上は、個々人が集団生活を支える論理に無関係に、こんではさらばに自発性を発揮することは

ほとんど不可能であり、有害であり、ナンセンスである。制度一般を大まかに否定するのではなく、その具体的内容を、共同体生活の中で個々人の自発性、創造性が集団との緊張関係において如何に豊かに実現されるかを問ひながら、逐一、考定してゆくべきであろう。

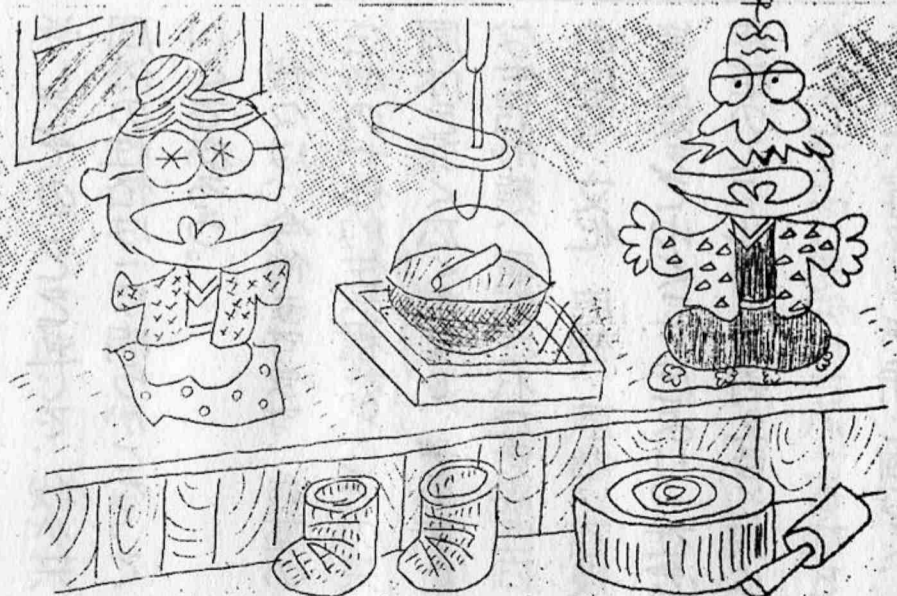
自由なる秩序を

我々は、秩序か自由(或いは無秩序)か、という問題の立て方をしない。我々は、自由こそ秩序、秩序こそ自由、という命題を成立させる。「自由なる秩序」を不断に追求する。それは単なる無秩序という意味でのアナーキーではなく、全く新たな自由、即、新たな(又しても)秩序である。

現実との葛藤の中で

念のために言しておくが、我々の自由は、我々の共同体は、現実との葛藤のない所で純粹培養的に築かれるものではない。つまり、我々のめざすものは、ユートピアでは全くない、ということである。

我々は明確に現代世界を支える地盤に立ちつつ、目的意識的に共同体内外に変革の種子を育成してゆくということ、これである。" 我々は政治主義的である。" 言々の批判は、政治の外へはもはや人間がのびるべきところを越え、これを我々の社会変革の基本姿勢への批判と受けとめるならば、これは政治を、更には、人間というものをよく知らぬ人の妄言としか評価の仕様はあるまい。



(我々の結集軸は)

我々は、たとえば三里塚の空想建設反対同盟のように、個別的斗争の実践を軸にして結集したのではない。ユナによりもまず、共同体を「ユ」という形で、弥栄と郷共

同体を創出した。我々の結集軸は共同体という言葉、イメージ、觀念であつた。前者のように、個別的斗争実践が先行して、しかるのちに「共同体」という形態がとられる場合には、形成される共同体の像が比較的に明瞭であり、よ

うが、我々のような場合には、各個人が描く共同体の概念は必然的に多種多様、或いは、かなり無限定的だらざるを得ないのでない。だ

ろうか。しかし、本紙上でも既に指摘されてきた如く、さまざまの共同体一般などはありえず、こ

れぞれの共同体の特殊性こそが、向題とされねばならぬ以上、我が

百人委及び弥栄にして、もし各個がバラバラに觀念し、行動すると

この面が多少ともあれば、これを是正し、成員の共同体觀の原則的統一のもとに、百人委及び弥栄の特殊性を鮮明にしてゆく必要があ

らう。

(共同の工ゴを明らかにせよ)

私は必ずしも「まず共同体を」という意欲が先行するケースが一概に悪いとは考えておらず、その



額上 仁

利突も多く存在すると思つており、この是非に關しては今述べない。

私がここではっきりとおきたいことは、次のことだ。つまり、共同体について、各個が如何に様々に觀念してあれ、共同体における個々人の工ゴが全くバラバラであるならば、共同体は本質的に決して成立しえなからうというこ

とである。誤謬を恐れず言へば、共同体なるものは、原則的には、アフリオリに各個人が共通の工ゴを持つてゐる時のみ、共同の工ゴを分有してゐる場合にのみ、成立可能と言へるのではないであらうか。本来、共同体とは或る工ゴの共通性を互いに認識し合つた者同士がその工ゴを貫徹するための有効な生活形態として形成されるも

のである。と私は考へる。(「これ

をいゆるムード的に表現したものが、「互ひに氣の合う者同士でない」と共同体は不可能」という言

辭になるのである) その際、個々人の工ゴがより多くの共通項を持つて持つほど、共同体は一般に堅固である。と言へよう。私は、

はあり得ない、と考へる立場に立つ。かかる奇怪なものももし存在するとすれば、それは同じ共同体のよしみ(ミツ)で連合可能な対象ではなく、端的なる粉砕の対象である。

要するに、なによりもまず、共同体各成員が共同の工ゴを分有していなければならず、或いは又、もし、分有してゐるべき共同の工ゴがいまだ不分明、未確立であるならば、これを可及的すみやかに分明にし、確立しなければならぬ、ということである。

幸か不幸か、我々は共同体形成の端初においては、個別的斗争の實踐を介することがなかつたが故に、それによる共同体像の明確化は凶凶なかつたが、我々の共同体が觀念上の理念にとどまらず、共同の工ゴを明らかならしめると共に、現実の矛盾に鋭く迫られは迫まる程、様々な個別的斗争實踐を

(觀念上の理念にとどまらず)

その身に担つてゆくであらうし、そしてそのことを通じて、我が共同体の性格は一層明らかとなつていくであらう。

我々は、今後ますます、変革のための一体的生活様態としての共同体を深く広く構築し、その新たな生活形態、更新された意識空間の中で、文化、思想、風俗、習慣等を變えてゆくことにより、社会変革のエネルギーを貯えんと共に、かくしてより先鋭化された意識をもつて、喜々として断之向なく、資本主義社会の具體的現実の厚い壁の穿れへと突進してゆくであらう。

百人委員会一般會計報告 (88%)

くり越し金	→	49653-
収入(定期カンパ6人)		10000-
支出		28060-
(1) 印刷料	1390-	
(2) 弥栄入会費	4500-	
(3) 備品	6600-	
(4) 紙回料	1770-	
(5) 百人委通信代	1200-	
残金	→	31593-
9/9現在土地共有券		196000-
(40人98口)		

※ 弥栄の土地代24万円ほどとちよとて(五藤)